



十一 砂浜クロスカントリー大会を走る？

みんな速そうだ。大会に出るといつもそう思う。それだけ自分に自信がないせいかな。これまで峰山で練習を積んで来たじゃないか。それでいいだろう。それに、ここは夏休みの合宿で練習した場所だ。そう。この大会は海水浴場の砂浜や松原の中の道を走るコースだ。地の利はある。はずだ。そう。結果は後からついてくる。もう一人の自分が励ましてくれる。

でも、どうしても、順位、他人が気になる。横を見る。地域の大会だから、参加人数はしれている。総数百人程度だ。それも高校生だけでなく、一般社会人も参加している。五十歳から六十歳ぐらいの自分の父親かそれ以上のおっさんもいる。だが、おっさんの方が不気味だ。おっさんでも若い頃から走っている人は意外に早い。と言うか、直人たちのように高校生は、身の程知らずで、自分の実力を知らないため、前半から飛ばして、後半はばてて、失速する人が多い。

それに比べて、おっさんたちは、自分の力を知っているから、前半は無理をしない。後半は、前半の調子を見ながら、今日の最高のパフォーマンスをする。そして、今日と言う日は最後であるかのように、自己記録の更新だけを目指す高校生は、野望が無謀であったことに今さらながらに気が着き（気が着いた頃には時既に遅しだが）ふと横を見ると、おじさんランナーが並ばれている。このおっさだけには負けまいと、一瞬だけターボエンジンを吹かすものの、花火はすぐに消え、おじさんランナーの背中が遠ざかって行く。

せめて、後塵を拝しながらも、おじさんに着いて行こうとするものの、あごが上がり、手足のふりがばらばらの状態では、走ることで精一杯だ。ただ、息を切らしながら、自分の足下が動く歩道のように進んでいくのを期待するだけだ。これが現実だ。横を見る。荒木先輩がいつものように悠然と立っている。本当に、この先輩はすごい。いつもと変わらない。

「先輩。緊張しませんか？」自分の緊張を解くために、あえてしゃべる直人。だが、その声はトンネルの中で叫んだ声のように他人の声に聞こえる。緊張している証拠だ。

荒木先輩がこちらを向いた。

「ああ。緊張するなあ」

言葉と裏腹に、声はトンネルからは出ていない。荒木先輩の喉から出ている。緊張のきの字も感じさせない。

「まあ、なんとかなるだろう」いつものセリフを言うと、自分の頬とふとももをぴしゃり、ぴしゃりと叩いた。気合を入れている。それに呼応したかのように、周りの選手たちも自分の頬やふともも、ふくらはぎを叩き始めた。ぴしゃり、ぴしゃり。ぴしゃり、ぴしゃり。ぴしゃりが参加選手たちに伝染していく。

直人も真似して、自分の頬を叩こうとした。それよりも先に誰かの手が直人の頬を叩いた。ぴしゃり。痛い。

「あはははは。これで気合が入った？」叩いたのは中山先輩だった。中山先輩は女子の部に出場して、既に走り終えている。応援に来てくれたのだ。

「はい。ありがとうございます。気合が入りました」直人は大きく頷く。ガチガチの緊張から、ほどよい緊張になった。

「よい」スターターがピストルを持ちあげた。直人は体を斜めに倒す。いつでもスタートできる態勢だ。左手のストップウォッチに右手の人さし指を添える。

「ドン」ピストルが鳴った。直人は他の選手と同様に、勢いよく飛び出した。

「直人君。後、残り三百メートルよ」松原から応援してくれる中山先輩から発破がかかる。

「はい」と答えるものの、スピードは出ない。加速じゃなく、鈍足だ。後ろから足音が近づいてくる。タッタッタッタ。タッタッタッタ。同じリズムを刻んでいる。そのリズムがドブプレー効果のように、だんだんと近づき、大きくなっていく。自分の調子が悪くなればなるほど、他人の調子が気になるものだ。

振り向いても自分は早く走れるわけではないのに、思わず振り向く直人。おっさんだ。歳の頃なら、直人の父親ぐらいだ。そのおっさんが直人に近づいてくる。直人のようによれよれじゃない。スタートからゴールまで、ほぼ同じペースで走るおっさん。直人のように前半飛び出して、後半ばてる走りではない。

やはり、うさぎよりかめが早いのか。このままでは追い抜かれる。高校生に勝ったと自慢する気だな。そんなおっさんに負けるものか。これまで、荒木先輩には大きく引き離されたものの、おっさんにだけは負けたくない。追いつかれそうになってスピードを上げる。引き離す。どうだ。抜けないだろう。

だが、十メートルも走るとスピードが落ち、元のぐたぐた走りに戻る。再び、おっさんの足音が近づいてくる。くそっ。しつこいおっさんだ。再び、ラストスパート。十メートルで失速。再び、おっさんの足音が耳元に聞こえてくる。その足音は「無理をしなくてもいいんだよ。素直に抜かれなさい」と囁いているようだ。その声を聞くとおっさんの自慢げな顔が浮かんでくる。

くそったれ。それを振り払う直人。再び、ラストスパート。こうなるとどれが本当のラストスパートなのか直人にもわからなくなる。ただ、おっさんに抜かれたい一心、意地だけだ。

ようやく、アスファルト道が終わり、大会名を記した横断幕が見える松原の土道に入ってきた。あの横断幕の下がゴールだ。たび重なるラストスパートで、体力を使い果たし気味の直人。同じペースで走り、最後は余力を使ってラストスパートを仕掛けてくるおっさん。

おっさんの肩が直人の肩に並んだ。相手がやや前に出る。追いつき並び返す直人。このままでは先行逃げ切れ型になってしまう。負けるものか。その一念だけだ。並走したままゴールに向かう直人とおっさん。

「まつばら〜ご〜え〜」直人は目をつぶり、無意識のうちに叫んだ。

「六十一、六十二」審判員が大声を発し、補助員がゴールした直人に紙を手渡す。息が荒くてすぐにはその紙が何なのかわからない。はあ、はあ、はあ、はあとゴールを抜けた後ろの砂浜を歩き、息を整える。ようやく落ち着いたので、その紙を見る。紙には六十一と記入されていた。

「六十一番か」空を見上げる直人。雲はない。青天の冬空だ。

「ありがとう。君のおかげで自己ベストが切れたよ。君に最後までついて行ってよかったよ」

元気に声を掛けてきたのはおっさんだった。おっさんの紙には六十二と記入されているのがちらっと見えた。おっさんは直人のようにバテバテではない。もう一度走れそうなくらいに余裕がある。

「じゃあ。また、どこかの大会で会おう」おっさんはさわやかな顔で直人の下を立ち去った。やつれたまま立ち尽くす直人。

「なんだ。俺、一人相撲じゃなく一人走りをしていたのか」口の中に溜まっていた唾を地面に吐き出した。

その後、荒木先輩や中山先輩たちと無料のトン汁を食べ、松原を後にした。帰りの電車の中で、直人は最後のラストスパートのことを荒木先輩に話す。

「おっ、それはいい経験をしたな。勝負事だからな。負けん気を出すことは大切だ。だが、それだけじゃない。同じ大会で、同じ空気を吸い、同じ体験をしているという共有意識を持つことも大事だぞ。お前も、そのおっさんに感謝しないと。おかげで最後まで走り切れたんだろ。これから、いろんな大会に出て、様々な経験を積みばいいよ」

「先輩にしてはいいこと言いますね」直人が茶化す。

「「しては」は余計だ。そんなタメ口きくなら、俺より早く走れ」

荒木先輩に怒られながらも、直人はなんだかいい気分になった。電車の揺れや枕木の音が子守唄のように直人を包んだ。直人は知らない間に眠ってしまっていた。